

【発表題目】

教師教育者に求められる資質・能力
—教育実習を考える会編『教育実習生のための学習指導案作成教本 社会科地歴公民科』の分析—

【発表構成】

1. はじめに
2. 教材の理念と構成
 - (1) 本書の特徴・構成からみる理念
 - (2) 内容からみる育成しようとしている教師像
 - (3) 本書が取り扱われている指導計画（シラバス）
3. 考察
4. おわりに

1. はじめに

本発表の目的は、社会科教員養成（pre-service teacher education）のテキストである『教育実習生のための学習指導案作成教本 社会地歴公民科』を分析することを通して、本書の理念と構成、本書を用いることでどのような資質・能力を育成しようとしているのか、一例として、実際にどのような指導計画のもとでどのような目的のために本書が用いられているのか、また本書を用いる教師教育者に求められる資質・能力について明らかにすることである。

よって、RQは以下のように設定する。

RQ①：教員養成教材としての本書の理念と構成はどのようなものか？

RQ②：本書はどのような教師を育成しようとしているのか？

RQ③：実際に本書はどのような指導計画のもと、どのような目的でテキストとして扱われているのか？

2. 教材の理念と構成

- (1) 本書の特徴・構成からみる理念

ここでは本書の特徴・構成をとらえ、本書の持つ理念について考察する。まず、本書の特徴として二点あげる。

第一に、本書の形態についてである。本書は全 124 ページで構成されており、分量は決して多いものとは言えない。そのため、本書の内容にも関係するのだが、教育実習時に持ち込んでも、さほど支障はないものであろう。また、指導案などを掲載しているために、見開き B4 サイズになっており、読者にとって確認しやすいものになっている。

第二に、構成についてである。別添資料 1-①の目次から見て取れるように、全体としては、二部構成であり、第一部では、学習指導案を作成するにあたっての心得が述べられ、第二部では、作成された指導案の紹介がなされている。

各章を概観すると、第一部の各章では、学習指導案とは何か、学習指導案はどのように構想し作成すればよいのか、授業後に学習指導案はどのように扱われるのか、について述べられ、第二部の各章（別添資料 1-⑦）では、社会・地歴・公民科の学習指導要領の目標に沿うことを前提とした、単元計画、学習指導案の実例が紹介されている。しかし、これらすべての基盤には、本書のタイトルや別添資料 1-②、1-③からもわかるように、授業実習つまり教育実習において、どのように行動すべきかに焦点が当てられているということが特徴である。

以上のように本書の形態の特徴、構成の特徴を考察した。ここから本書の教材としての理念については、全体を二部に分け、第一部で指導案の考え方や作成の準備・プロセス・注意を概説し、第二部で実例をもとに説明する構成とし¹、指導案を作成するという行為に必要な理論を説明することや、実例をもとにして指導案作成の手助けをすることはもちろん、教育実習生のために、事前指導や事後指導で通読されたいという目的を持っていると考えることができる。

よって、RA①は以下のようになる。

RA①：本書は、学習指導案作成の心得、実例紹介という二部構成であり、教員養成課程において避けて通ることはできない教育実習の事前指導や事後指導で活用してもらいたいという理念を持っている。
--

(2) 内容からみる育成しようとしている教師像

次に、本書が育成しようとしている教師像を明らかにするために、本書の内容の特徴について考察する。本書の内容の特徴として、主に二点あげられる。

第一に、教科の目標を考えることや、学習指導案を作成することの根本にある学習指導

¹ 『教育実習生のための学習指導案作成教本 社会科地歴公民科』2011, p.1

要領についてである。本書では、「学習指導要領とこの解説から把握すべきことからは、なによりもまず、担当教科・科目の趣旨や課題の全体像と、教科・科目全体をつらぬく目標を構成するさまざまなレベルの目標やねらい等」²とされ、ここでの全体像とは、「教科観」や「科目観」と示されており、なぜ社会科を教えなければならないのか、社会科の目標は何なのか、と問い、その答えを導き出そうとする時には、学習指導要領やその解説の内容を理解することの必要性が述べられていると考えられる。また、学習指導案の作成にも、学習指導要領やその解説を十分に読み、単元や教材の基本的な背景を理解することが求められる³とし、授業を構成するという作業において、学習指導要領の目標に沿った授業を構成すべきという前提がうかがえる。

第二に、本書において育成しようとしている実践知についてである。まず、本書の構成で述べたように、学習指導案作成のノウハウを学ぶといった授業開発のための学びに、本書は重きを置いており、学習指導案の作成だけでなく、授業で使用するための資料・プリントの作り方⁴にまで言及されている。さらに、別添資料1-⑤の**学校の環境理解**では、「今日、学校と地域との連携の試みが続けられている。地域の人々と学校がどのように交流し、どのようにそれを生かそうとしているのかを知ることも重要だ。」⁵とあるように、教師として赴任した学校において必要とされる能力の育成が目指されていると言える。また、**学校の教育方針やハード面の理解**では、学校の教育方針を理解し、校庭の広狭、図書館の充実度などの学校の設備にまで把握をしておくことが求められている⁶。

以上のように、本書の内容の特徴的な部分について考察した。ここから、本書が育成しようとしている教師像については、学習指導要領やその解説を理解し、その理解を自身の教科観や科目観、授業開発の理論の基盤にし、授業を実践することができる力を有していることはもちろん、学校の周囲の環境を把握しようとし、学校業務にまで対応しうる実践知を持った教師と考えることができる。

よって、RA②は以下のようなになる。

RA②：教科観や科目観、授業開発の基盤には学習指導要領が位置付けられ、実際に現場に出た際に、すぐにでも必要とされるであろう実践知を有した教師。

(3) 実際に本書が取り扱われている指導計画（カリキュラム）

² 同書 p.10

³ 同書 p.48

⁴ 同書 p.73

⁵ 同書 p.18

⁶ 同書 p.18

では、実際に本書はどのような指導計画のもとで、テキストとして取り扱われているのだろうか、ここでは、一例として別添資料2にある南山大学（社会地歴科教育法 B1, B2）、関西大学（地理歴史科教育法（二））、山梨学院大学（公民科教育法）（以下、三大学）の2015年度のシラバスを取扱い、本書をテキストとして使用している教員養成課程における講義は、どのような指導計画のもとで行われているのか、について述べる。

まず、各大学の指導計画の詳細についてみていく。南山大学では、授業目標については、効果的な授業の在り方について考え、学習指導案の作成を通して授業力を高め、模擬授業を通して実践的な力を養うと定め、授業計画については、実際の社会科、地歴科の授業や年間指導計画に軽くふれ、全15講の内、半分以上の8講を学習指導案作成及び模擬授業とその評価にあてている。

関西大学では、授業目標については、授業を行うにあたっての基礎的な知識、歴史学の作法を踏まえたうえで、指導案の作成や模擬授業を通じて、授業運営の基本を学び、実践力を身に付けると定め、授業計画については、歴史教育と歴史学研究、指導案作成と学習指導要領に軽くふれ、全15講の内、10講を模擬授業の実施と指導案を含めた評価にあてている。

山梨学院大学では、授業目標については、教員として必要な教育方法の基礎を学び、授業実践の力を養うと定め、授業計画については、全30講の内、5回を公民科教育の変遷の歴史にあて、16回を学習指導要領の変遷及び改定の内容にあて、8回を学習指導案作成による授業開発にあてている。

次に、この三大学に共通することをあげる。第一に、三大学ともに教育学部を持たない私立大学であり、教員養成課程の学生たちはおそらく母校に教育実習を受け入れてもらうことが多数派であろう。第二に、授業目標については、教師に必要とされる授業実践力を養うことを目標としていることが共通している。授業計画については、学習指導要領の解説や、学習指導案作成および模擬授業に多くの時間数を費やしている傾向にあると言える。

これらの授業実態から、先に考察した本書の理念や育成しようとする教師像を踏まえ、どのような目的で本書をテキストとして使用していると考えられるのか、について三点述べる。

第一の目的に、本書が授業開発の学びに重きを置いた構成になっていることが、三大学に共通する学習指導案の作成に多くの時間数を費やしている授業において良き教材となりうるためである。

第二の目的に、本書の内容に記載された授業開発だけでなく、授業実践にまで言及していることが、三大学の授業目標に共通する授業実践力の育成を達成しうるためである。

第三の目的に、本書の理念である教育実習に焦点を当てた構成が、教育学部を持たず、教員養成課程の学生を母校に受け入れてもらうであろう三大学にとって、事前指導や事後指導に本書を活用できるためである。

よってRA③は以下のようなになる。

RA③：本書は、学習指導案作成や模擬授業に多くの時間数を費やす指導計画のもと、学習指導案の作成の手助けや授業実践力の向上、教育実習に向けての作法を身につける目的で、テキストとして扱われている。

3. 考察

本章では、本書を用いる教師教育者に求められる資質・能力について考察する。主に2点述べる。

第一に、ある程度の実践経験のある教師であり、授業開発力、授業実践力に優れた教師教育者である必要がある。なぜなら、常に教育現場に対して視点を向けた内容であるため、現場での授業開発、授業実践を経験した教師教育者にしか伝えることができないことが多く取り扱われていると考えられるからだ。

第二に、現場で教育実習生を受け入れた経験が豊富にある教師教育者である必要がある。なんと言っても本書は教育実習生のために書かれた本であるために、教育実習生を受け入れる側の教師としての経験が必要不可欠であろう。

また、前回本講義で議題に上がった、授業分析、授業開発、授業実践の内容を社会科教員養成（pre-service teacher education）の講義で、どのような割合で取り扱っているのかについては、本書を取り扱った講義の場合は、授業分析に全くと言っていいほどふれず、主に授業開発、授業実践の内容を取り扱った講義と言えよう。

4. おわりに

本発表では、教育実習を考える会編『教育実習生のための学習指導案作成教本 社会科地歴公民科』の分析を通して、本書の理念、本教材が育成しようとしている資質・能力、実際にどのような指導計画のもとで本書が用いられているのか、本書を用いる教師教育者に求められる資質・能力を明らかにした。しかし、今回取り扱った指導計画（シラバス）は、発表者が意図的に取り上げた一例に過ぎない。

日本の社会科教員養成（pre-service teacher education）の現状として、広島大学のよう社会科教育学を専門とする教授たちによる講義が行われている大学は、少数派だろう。また、今回取り上げたような講義の事例は、実際に発表者自身が受けた講義内容に類似しており、教育学部を持たない私立大学で多く行われていると推測される。

広島大学に閉じこもっているのは把握することは難しいが、実際に全国で行われている社

会科教員養成（pre-service teacher education）の講義について目を向け、どのような資質・能力の育成が目指された教師たちが、教壇に立とうとしているのか、について研究することも今後の日本の教師教育研究に大きな示唆を与えると実感した。

【参考・引用文献】

- ・教育実習を考える会編『教育実習生のための学習指導案作成教本 社会科地歴公科』蒼丘書林，2011年。別添資料1

として p1, 2, 8, 9, 12, 13, 14, 15, 18, 19, 46, 47, 56, 57, 98, 99, 100, 101 を使用。

- ・教育実習を考える会編『新編 教育実習の常識 事例にもとづく必須 66 項』蒼丘書林，2012年。

- ・南山大学シラバス

<http://office.nanzanu.ac.jp/SYLLABUS/2010/SYLLABUS/20100109185.htm>

（最終閲覧日：5月10日）

- ・関西大学シラバス

<http://syllabus3.jm.kansai-u.ac.jp/syllabus/search/ref/0/3/16/031694.html>

（最終閲覧日：5月10日）

- ・山梨学院大学シラバス

<https://ygu-ibs.cc.ygu.ac.jp/syllabuspub/SyllabusIP.asp?mode=5&moji=&cDSL=629>

（最終閲覧日：5月10日）

